

京都大学の
川上浩司先生
に聞きました。



「川上先生、「不利益」の
視点から考える未来って、
どんなものでしょうか?」

今回は、不利益がもたらす益である「不利益」の研究に取り組む川上浩司先生を京都大学デザイン学ユニットの研究室に訪ね、お話を聞かせていただきました。

**出雲市で生まれた私は、その家に
今でも愛着を持っています。**

川上先生は、どんな家で育った、どんな子どもだったのでしょうか?

「私は鳥根県出雲市大社町の出身で、もう生まれつきの出雲大社の氏子だったんです。江戸時代にできた木造の旧家屋で育ちました。台風が来た時などは風の音がすごくて、過ぎ去った後には隙間から砂が入っていたことを覚えています。昔の囲炉裏の煙抜きの窓もあるような、昔ながらの家でしたが、理想の家と聞かれるとそ」

の家が思い浮かびます。」

**不便だからこそいいこともある。
不便の益を大事にしたいのです。**

川上先生と「不利益」の出会いについて、聞かせてください。

「もともと機械とか、物づくりやクラフトマンシップに憧れていて、工学部の機械系に進みたいと思っていました。どんどんと成長を続けていくその先には、いいことがあるに違いないと。それから京都大学に進学して人工知能などを学ぶようになる中で、私の恩師から「不利益」という考え方を教わりました。それは、ただ便利だけを指向するのではなく、人間と人工物、機械との付き合い方を真面目に考えましようという意味だと私は受けとめています。機械が人の



学生たちとレガッタに出場した、研究者になりたての頃の川上先生。(後列左から2人目)

代わりにするというのはあくまでも一部であって、他の付き合い方もあるのだと気づきました。そこから視野が広がり、この研究にのめりこんでいったのです。」

あらためて、川上先生が研究する「不利益」とは、どんなものでしょうか?

「読んで字のごとく、不便の益です。不利益ではありません。よく「便利で豊かな